

Title	書評 Oaklander, L. Nathan: The Ontology of Time (Prometheus Books, 2004, 366p.)
Author(s)	佐金, 武
Citation	哲学論叢 (2007), 34: 122-125
Issue Date	2007
URL	http://hdl.handle.net/2433/70795
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

Oaklander, L. Nathan: *The Ontology of Time* (Prometheus Books, 2004, 366p.)

佐金 武

著者 L. N. オークランダーは、ミシガン大学哲学科の教授であり、分析的伝統における時間論の主要な論者の一人である。既に発表された論文や書評からなる本書は、時間論の基礎から時間に関わる様々なトピックまで多岐にわたる。彼はいわゆる無時制理論の有力な推進者であるが、立場の異同にかかわらず、時間の哲学に興味を持つ研究者にとって本書は必読文献といえる。その構成はおよそ以下の通りである。

オークランダーはまず、マクタガート (McTaggart, 1908, 1927, pp. 9-31) に起源する、A-系列と B-系列の二分法を説明する。A-系列とは、ある出来事が過去であること(かつてあったこと)、現在であること(今であること)、未来であること(やがてであろうこと)に基づく時間把握であり、A-系列主義的理論(時制理論一般)は、これら時制の実在性を何らかの仕方で擁護する立場である。これに対して、B-系列とは、出来事の間前後関係に基づく時間把握であり、B-系列主義的理論(無時制理論)は、時制は無時制的に分析可能であって実在しないと考える立場である。

オークランダーは、いわゆるマクタガー

ト・パラドックスを援用しつつ、対抗する時制理論が維持できないことを主張する。その際彼は、時制理論一般を一括りにして攻撃するだけでなく、それを出来事存在論の観点から、「現在主義」、「オープン・フューチャー理論」そして「A-B 混成理論」の三つのものに分類し、各々の理論を順に検討することを通じて、それらが維持不可能であることを論じる。後に解説するように、ここでのオークランダーの論述は、本書において最もスリリングな部分である。

後半部においてオークランダーは、無時制理論についてよくいわれる困難は解決可能であることを精力的に論じている。無時制理論に対する古典的批判は、我々の時間経験に纏わる問題を指摘する。そして、この中心にあるのが、プライアー(Prior, 1959)の議論である。それによると、出来事前後関係を述べる無時制的な文は、時制を伴う文の意図された意味を伝えていない。何か恐ろしい体験、たとえば歯医者に行くという出来事が終わったときに、私が「ああよかった、今終わったよ!」と発言するでしょう。明らかに私は、「ああよかった、歯医者が終わったのはこの発話と同時期だよ」と同じことを意味しようとは意図していない。なぜなら、これら二つの出来事前後(同時)関係は永久的事実であって、このことを「ああよかった」と思う人は誰もいないだろうからである。無時制主義者メラー(Mellor, 1981, 1998)はかつて、時間の経過にしたがった適切な行為のためには、

時制を伴う信念が必要とされるとしながらも、この信念は無時制的な事実によってその真理条件を与えることができるのだから、プライアーの議論は無時制理論に対する反駁にはならないと応じた。オークランダーは概ねメラーのこの応答を踏襲しつつ、それに対して慎重に批判を加えながら、無時制理論の精緻化に努めている。

本書はまた、最終部において、人格の同一性や、道徳的責任、神の先見性と人間の自由の問題など、時間に関わる様々な哲学的テーマをも射程に収め、包括的だが緻密な議論によって無時制理論を擁護する。

以下、本書評では、時制理論に対するオークランダーの批判に焦点を絞りたい。

オークランダーの議論の最も注目すべき特徴は、メラー(*ibid.*)に遡る時制の非実在性の議論からさらに踏み込んで、様々な時制理論に対する内在的批判を展開している点にある。メラーが提起した問題とは、時制表現は無時制的に分析可能か否かというものである。これに対して彼は、時制表現は無時制的な真理条件を与えることにより分析可能であるがゆえに、時制は実在しないと結論した。しかし、元々のマクタガートの論証を注意深く反省してみれば、それが意図していたのは、時制の分析可能性というよりもむしろ、時制的変化という概念の不可能性だったことが分かる。つまり、マクタガートは、「かつて未来だったものが今現在でありやがて過去になるだろう」ということによって表されるような変化がいか

にして可能かと問うたのである。そして、彼は、このような変化は(説明)不可能であるがゆえに、時制は実在せず、それを基礎とする変化の次元としての時間という考えも維持できないと論じたのだった。オークランダーの着眼は、正にこのことにある。そして、時制が実在的であるとする時制理論に与する論者は、時制的変化の(不)可能性をめぐるこの問題に一定の回答を与えるべきだという。しかし、どんな種類の時制理論もこれに失敗するというのが、彼の診断である。

どのような時制理論も、時制的変化の可能性の問題に対して、決定的な解決を与えられない。このことを示すためにオークランダーは、時制理論一般を、出来事の存在論的観点から三つのものに分類した上で、各個の理論を順に検討する。一つは、現在だけが存在するとする現在主義の立場である。もう一つは、現在までの出来事は存在するが未来は存在しないとするオープン・フューチャー理論の立場である。そして、最後に、出来事の前後関係と時間的性質としての時制を共に原初的概念とするA-B混成理論の立場が批判的検討の対象である。

時制的変化が可能であるためには、次の三つの基準によって、この変化についての説明が実行可能かどうかを吟味しなければならない。すなわち、時制的変化についての説明は、まず 1) 理論的に整合的であって、2) 時間の経過の順序を導くようなものであり、かつ 3) その不可逆的移行が帰

結するようなものでなければならない。

オークランダーの論じるところでは、三種類の時制理論は、時制的变化を説明する際、上の基準のいずれかに抵触する。それゆえ、時制理論は維持し得ないという。書評者自身は、オークランダーの議論に全面的には賛同しかねるが、次の二点においては、彼の見解と一致する。まず、現在主義において時制的变化の説明は原理的に実行不可能であること、また A-B 混成理論においては、上の 3) の要請が満たされないため、その説明は不十分であることの二点においてである。このことの原因は、本誌掲載の拙論(「マクタガートに対していかに応答すべきか」)において述べたので、ここではその詳細は割愛する。ただし、私は、オークランダーの見解とは異なり、オープン・フューチャー理論による時制的变化の説明に不都合を見いだせない。以下、このことについて、簡単にコメントしよう。

彼がオープン・フューチャー理論として分類する論者には、ゼイリコビッチ (Zeilicovici, 1989) と トゥーリー (Tooley, 1997) が含まれる。前者に対する批判の要点はこうである。ゼイリコビッチによると、マクタガート・パラドックスの要因は、時制的变化を「動く今」の想念によって捉えようとしたことにある。そこで彼は、時制的变化という概念は、問題を含んだこの想念に基づけなくとも、有意味に解釈できることを論じる。ところが、オークランダーの指摘するところでは、ゼイリコビッチは、

オープン・フューチャー理論の存在論を維持しつつも、B-系列の単一性を同時に主張するため、彼の理論では結局、動く今の想念から逃れることができないという。

ゼイリコビッチの議論に関する限り、この批判はおそらく正しい。しかし、オープン・フューチャー理論は必ずしも、B-系列の単一性についての主張に関与する必要はない。単一の B-系列における変化というアイデアがおかしいとすれば、それは変化の不可能性ではなく、単一の B-系列という考えが棄却されるべきことを示しているに過ぎない。また、時制的变化によって表されるはずの時間の経過は、単一の B-系列における変化である必要もない。少なくとも、そのように応答することができる。

次に、トゥーリーへの批判として、オークランダーは以下のように述べている。「彼 [トゥーリー] が主張するのは、[存在するものの] 総和は無条件に存在しているが、新たな無時制的事実が存在するようになり、時間が経過するにしたがって、その総和に付け加えられる。しかし、このことがいかにして可能なのか。」(p.138)、と。これがパラドキシカルに聞こえるのは、存在するものの総和が時間を通じて変わらないとする、静的な存在論が前提された場合である。しかし、トゥーリーはこの前提を明確に否定しており、出来事存在論を動的に展開することによって、時制的变化を説明しようと試みるのである。動的な出来事存在論の可能性については、前述の拙論を参照さ

りたい。

様々な時制理論の存在論が明らかにされ、その内在的批判が試みられているのに対して、無時制理論の存在論があまり明らかではないのは残念なことである。オークランダーは、時制的変化によって表されるとされる時間の経過という考えは維持できないとしながらも、出来事の前後関係によるB-系列的な時間把握だけで、時間の継起性 (succession) を捉えるのに十分とする。そして、無時制理論が主張するのは、ある時点にある出来事が位置しており、それより前あるいは後の別の時点に別の出来事が位置しているということだけであり、それゆえ、あらゆる出来事が一斉に存在するというような存在論に関与する必要はないという。とはいえ、B-系列の存在論そのものはやはり、出来事の一斉的な存在を含意するのではないかという懸念は払拭されない。このことが、無時制理論に抗して時制理論を支持したいことの動機の一つである。

さて、オークランダーと書評者の見解のうちどちらが正しいのであれ、以下のことは明記しておくに値する。時間論における従来の対立構図は時制理論対無時制理論であった。これは、既に述べたように、表現としての時制が実在におけるその対応物を持つかどうかということを争点としている。これに加えて、静的な時間論と動的なそれとの対立があり得る。ここで私が動的な時間論と呼ぶものは、時制的変化の分析を試みる理論に他ならない。時制理論一般には

必ずしも、時制的変化についての説明が含まれているとは限らないし、その説明が原理的に実行不可能な場合もある。現在主義に分類される時制理論は、無時制理論とは全く異なる仕方ではあるが、静的な時間論に分類されるだろう。A-B 混成理論は、いわば中間領域に位置する。オークランダーと書評者の見解の相違は主に、オープン・フューチャー理論の可能性に関わる。書評者は、時制的変化についての分析的説明はこの理論の下で実行可能だと考えるが、オークランダーは、いかなる時制理論も求められている説明の基準を満たさないと考える。したがって、動的な時間論などは存在しないという。私見では、オークランダーが示唆する重要な視点は、上のような論争がありうるということ、このこと自体である。

文献

- McTaggart, J. M. E. (1908). 'The Unreality of Time', *Mind*, 17, 457-74.
- (1927). *The Nature of Existence*, Vol. 2, Broad, D. C. (Ed), Cambridge University Press, Cambridge.
- Mellor, D. H. (1981). *Real Time*, Cambridge University Press, Cambridge.
- (1998). *Real Time II*, Routledge, London.
- Prior, A. N. (1959). 'Thank Goodness That's Over', *Philosophy*, 34, 12-7.
- Tooley, M. (1997). *Time, Tense and Causation*, Oxford University Press, Oxford.
- Zeilicovici, D. (1989). 'Temporal Becoming Minus the Moving Now', *Nous*, 23, 505-24.